

平成26年度

第1回 英数特科クラス入試
第1回 特別進学クラス入試

入学試験問題

国語

座席番号	
受験番号	
氏 名	

受験上の注意

1. 試験時間は、50分間です。
2. 答えを書き始める前に、問題用紙に座席番号・受験番号・氏名を、解答用紙に座席番号・
受験番号・氏名を書いてください。
3. 字数制限のある問いでは、句読点や符号（ 、 。「 」など）も一字と数えます。
4. もし、読みにくいところがあったら、静かに手を上げて、試験監督の先生に聞いて
ください。
5. もし、解答用紙が破れたときは、静かに手を上げて、試験監督の先生に知らせて
ください。
6. もし、気分が悪くなったときは、静かに手を上げて、試験監督の先生に知らせて
ください。
7. 問題を解き終わっても、途中退室はできません。

一、次の各問いに答えなさい。

問一 次の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① ヨウイには解けない問題だ。
- ② チューリップがハツガする。
- ③ ミチの世界に飛びこむ。
- ④ 春はシンリヨクが美しい季節だ。
- ⑤ オゴソかな式典がもよおされる。

問二 次の――線部のカタカナと同じ漢字を用いる熟語を、それぞれ後のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ① すすぎがムラがつて生える。
ア 集会 イ 群衆 ウ 圧縮 エ 徒党
- ② 交通安全のヒヨウ語を作る。
ア 批評 イ 表情 ウ 標識 エ 投票
- ③ 文章のコウ想を練る。
ア 構造 イ 興奮 ウ 講義 エ 耕作

- ④ これは特キヨを受けた発明品だ。
ア 居住 イ 退去 ウ 拳手 エ 許可

- ⑤ 学芸会のシ会を務める。
ア 師匠 イ 歴史 ウ 司法 エ 使用

問三 次の――線部と同じ意味・用法のものを、それぞれ後のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ① みなさんのことは忘れません。
ア これは私の好きな本だ。
- イ 春が来たのでうれしい。
- ウ 妹は走るのが得意だ。
- エ 私の父は会社員です。

- ② カッターで切る。
ア かぜで学校を休む。
- イ 公園でサッカーをする。
- ウ パンをつまんで食べる。
- エ 折り紙で鶴を作る。

③ 彼の今後の案じられる。

ア しだいに秋の気配が感じられる。

イ 先生が教室に来られる。

ウ きつい練習にもたえられる。

エ 姉の服を着せられる。

④ 母は真相を知っているようだ。

ア 話し方が大人のようだ。

イ まるで夢を見ているようだ。

ウ 寒くて冷蔵庫の中のような。

エ どうやら風邪をひいたようだ。

⑤ 今日はもう練習しない。

ア テーブルの上がきたない。

イ 最近、野菜の値段が安くない。

ウ その単語の意味を知らない。

エ ペンもノートもない。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

遊ばなくなった子どもは、いくつもの大きな忘れものをしている。

なにしろ遊び相手という、対人関係がなくなってしまったのだ。人間は相手との往復関係のなかでどんどん成長していく。それがなくなることは、成長がゆがめられることを意味する。遊び仲間には年上の子もいるし同年、年下の子もいる。そのなかで成長するはずの、大きな教育の場を失ったということだ。

しかも遊びでは原則として実力本位だから、強いものが勝った。そのためいろいろと勝つ工夫をした。

ベーゴマという遊びがあった。コマを回して相手のコマをはじき飛ばせば勝ちである。

I コマのまわりを削り、鋭くとがらせて

おくと強い。

いかにも勝負強そうな悪ガキは、精悍な形をもったコマをつくりあげては、ちらちらと見せた。

正月には近所の草原に集まって風をあげた。風の本体だつてつくこともあったが、店から買ってきた風にしても、新聞紙を細長く切つてつないだ尾をどれぐらいの重さや長さにすればよいか、さまざまな工夫がいった。軽いきりもみになつて落ちてしまう。もちろん重いとあがらない。

風が少ないときは走ると多少はあがる。しかしそんなことをするのはガキっぽくてこけんにかかわる。年かさの子は年かさらしく悠然とかまえながら、しかしりっぱにあげるのである。

メンコという遊びはいちばん人気があった。自分のメンコを地面にたたきつけて、相手のものを裏がえしにしてしまう。すると自分のものにできる。

そのためにはメンコに威力がなければならぬ。ひそかに蠟を塗って重みと力をつける。

竹トンボなどは、まさしく手づくりだった。竹を切つて軸と羽をつくり、くるくる回して高くとばす。よく飛んだ方が勝ちである。

竹トンボは軸穴が大事で、大きすぎるとまったく飛ばない。狭くてもひっかかる。ほどよさがコツだ。そして羽の削り具合が絶妙で、羽の薄さ、カーブのつけ方がすべてを決定する。こうした高級なことは、とかく都会っ子は不得手だった。

いまではもう名前すら忘れられたものばかりだが、こんな遊びには手づくりの創意工夫が必要で、つくり上げたものにはたいへんな愛着があった。③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

Ⅱ

人間関係から生まれる「対話」のなかで、子どもはそれぞれより上等な立場をつくっていくことにしのぎを削るのだから、無言の塀にボールを投げつけているのとは、わけがちがう。

どうしたらメンコを一枚でも多くとれるか。それをつまらないことというのは当たらない。

勝負という「対話」をばげしく交わしながら自分をくん練していくところに、むかしの遊びの値打ちがあった。

鬼ごっことか隠れんぼなどもよくやった。探偵ごっこなどもスリルがあった。こういう集団の遊びはいっそう濃密に集団の規律に従うのだから「ことば」が飛び交い、自分にふりかかり、自分からも「対話」をこころみる必要があった。

それがテレビゲームに代わってしまうと、生身の相手や仲間から発せられる「ことば」がない。だまって指先を動かしているだけで、自分の生の「ことば」を発しない。

お互いが人間らしく勝ちほこったり、くやしがつたりする「対話」。お互い勝とうとする激しい心の「ことば」。仲間として規制され、規制に従おうとして交わしつづけられる「ことば」——こうした「ことば」をもつむかしの遊びをすてしまった現代の子どもは、みんな成長を拒否する、重度の失語症である。

さきほど鬼ごっこにふれたが、「鬼ごっこ」は「鬼ごと」が変化したもので、「ごと」とは、いまでも「ああ暑い。夏のごとくだ」などと、いささか古風にいうことがある、あの「ごと」である。つまり「A」「A」という意味になるが、「ごと」はもつと古くは「ごと」という意味だ。

つまり「鬼ごっこ」は「鬼と同じごと」「ままと同じごと」は「ままと同じごと」をする遊びである。だから何にでも通用する。「兵隊さんごっこ」「学校ごっこ」などと。それぞれまねをして遊ぶことだ。

鬼ごっこはウソの鬼が出て来て人間をつかまえては殺すまねをする。ままと同じことは家庭の日常をまねする。なかでも「ままと同じごと」は御飯のことだから、主婦の食事の準備、世話、片付けが中心となる。客が来ると茶菓の接待があり、とかく家庭をとりしきるお母さんを主役とするまねごとが「ままと同じごと」である。

「兵隊さんごっこ」「戦争ごっこ」はかなしいかな歴史が古くて、日本では五月五日に子どもたちが石を投げ合い、斬り合いをして遊んだ。「印地打ち」とよばれる。

さてこうした「ごっこ遊び」は、それぞれ大人たちのやっていることをまねする遊びだから、知らず知らずのうちに、大人たちのやり方を身につけることとなる。同じ仲間のなかにいる年上者がしぜんに指導役になる。

彼が鬼からの逃げ方、戦争の仕方をおしえ、彼女が主婦役をつとめて年少のものは来客や子どもになって、少しずつ「ままと同じごと」の家族がつくられる。

Ⅲ

「ごっこ遊び」の姿など、もう何年も見かけなくなった。要するに、子どもにとっても大事な大人への成長過程であるまねごとが、遊びといっしょに子どもの世界から消えたのである。

まねごとを通していままでの子どもは少しずつ大人の習慣やふるまいを身につけてきた。その過程が、もうないのである。

④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

子どもは戸外の集団の場を失っただけではない。戸内でも教育の場をもたないのである。

大むかしはいろいろを囲んで家族が集まり、子どもはそこでいろいろなことを学んだ。家族が集まらなくてもおじいさん、おばあさんが昔話をしてくれたり絵本を読んでもくれたりして、彼らを中心に子どもの輪ができた。

④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

Ⅳ

④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

学校へいくのに「遊びましょ」と誘う子も、意外に捨てたものではないとひそかに思うのだが、どうであろう。

(中西 進『日本人の忘れもの』による 問題作成のために本文を一部変更したところがあります。)

- ※1 精悍……………たくましく見えるさま。
- ※2 キリもみ……………ぐるぐると回りながら急降下するさま。
- ※3 悠然……………落ち着いて急がないさま。
- ※4 いろり……………床を四角く切りぬいて、火をたくところ。
- ※5 君臨……………ある分野で絶大な勢力をもって他を支配すること。

問一 — 線部①「それ」は何を指していますか。本文中から五字以上十字以内でぬき出しなさい。

問二 — 線部②「大きな教育の場」とありますが、どのような「場」かを説明した次の文の□に当てはまることをこれより後の本文中からぬき出しなさい。

さまざまな仲間との関係の中で□□□□□□□□□□(十字)場。

問三 I V に当てはまることばとして最も適当なものを、それぞれ次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二回以上選ぶことはできません。

- ア ところが イ だから ウ つまり エ ましてや

問四 線部 a「こけんにかかわる」・ b「しのぎを削る」の本文中での意味として最も適当なものを、それぞれ後のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- a 「こけんにかかわる」……
ア 大人からの批判を受ける
イ 転びやすくなってしまう
ウ 今までの信用が失われる
エ 品位や体面がそこなわれる

- b 「しのぎを削る」……
ア はげしく争う
イ たがいにはげましあう
ウ 神経をすり減らす
エ 都合よくことを運ぶ

問五——線部③「この創意工夫は勝負という対人関係から出てくる」とありますが、これはどういうことですか。最も適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア 愛着の持てる遊び道具を作る工夫は、遊び仲間と真剣に勝負する中で、しだいに上達していくということ。

イ 都会の子が勝負に勝つための工夫は、年上の子からほどよいコツを教えてもらふことで得られるということ。

ウ 遊び道具を手作りするときの工夫は、仲間の中でより上等な立場に立とうとすることから生まれてくるということ。

エ より上等な立場に立つための工夫は、対戦する者同士が互いに道具の作り方を観察することから始まるということ。

問六

A

に入ることばとして最も適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

エ ウ イ ア
く く く く
になっ に見える のようだ のはずだ

問七——線部④「『ごっこ遊び』とありますが、その働きを説明した次の文の□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

同じ仲間のなかにいる

ア

(三字) がしぜん

イ

(三字) になり、

ウ

(九字) に大人のやり方を身につけるといふ働き。

問八——線部⑤「戸内でも教育の場をもたない」とありますが、それを説明した次の文の□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

テレビの出現によって

ア

（三字）な情報を

イ

（四字）られるだけで、

エ

家族からの

ウ

（十三字）や

（四字）が

なくなっているということ。

問九——線部⑥「意外に捨てたものではない」とありますが、それはなぜですか。本文全体の筆者の考えに基づいて、分かりやすく説明しなさい。

問十 本文の内容として正しいものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア 現代の子どもには、遊び道具を手作りする機会や、集団で行動する場が全くなくなっている。

イ 子どもたちは実力本位の遊びの場で、強いものに従わなければならないことを身をもって学ぶ。

ウ 昔の子どもたちは、遊びの場において自分をきたえたり、大人のふるまいを身につけたりしていた。

エ テレビは現代の幸福な家庭の象徴として、昔のいろろに代わって家族団らんの核となっている。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(前書き)

小学校五年生の小本文弘(僕)／＼(フミ)は、友達の根岸雄二(雄ちゃん)と夏休みの間に、町のどこかに埋まっているらしい不発弾を探していた。そこに転校生の高井くんも加わったが、ささいなことで「僕」は雄二と言ひ合いになり、それ以来二人の仲はぎくしゃくしていた。

翌朝。いつものように宿題を済ませ、自転車にスコップと探知機を載せて、出掛ける準備はしたけど、自転車にまたがることはなかった。残りのやぶの中での不発弾探しをひとりでやると大見得を切ったものの、いざとなるとおっくうだった。^{※1}冷静になれば、たったひとりであのやぶの中に入るのは不気味だ。それに、もしもひとりで出掛けて、矢口たちとばったり鉢合わせなんてことも考えられる。考えただけでもぞつとする。

このままでは、不発弾探しは完全にストップしてしまう。これも元はと言えば、雄ちゃんのせいだ。その雄ちゃんからは何の連絡もない。何やってんだ、あいつはよ。

仕方なく家で、美幸相手に、ババ抜きや神経衰弱をしながら暇潰しをしてみたけど、勝負には圧勝する。負けたら悔しいけど、絶対に負けないというトランプほどやっていて面白くないものはない。

夜は夜で、殴られた日からできるだけ父の傍に寄ることは避けた。お陰で、父が帰宅すると見たいテレビ番組も我慢して、僕は茶の間から離れた。

不発弾探しをサボり始めて三日目の朝。

^{※3}夏休みの友もちゃぶ台に広げたまま、何か気が乗らずに手を付けられない。

「あー、つまんねーなあ」

茶の間のテレビをつけっ放しにして、床の上にゴロゴロする。

美幸が「兄ちゃん、遊ぼ」と寄ってきて、いいかげん相手をするのが面倒で「あっちに行け」と、足で蹴って追い払った。美幸は泣きながら、庭先の祖母に「兄ちゃんが蹴った」と告げ口しに行く。

祖母が庭先から「フミ、何、泣かせてんだ」と僕を叱る声が届く。

「もう、煩せーな」

僕は起き上がると、縁側の端に移動した。

縁側の西隅には、叔父たちが昔使っていた木製の勉強机が、ミシン台と並んで置いてある。所々、表面がはげたひどく古ぼけた机だ。

部屋中にある座布団を集めてきて、それを机のあしに立て掛け、壁を作った。机の下に小部屋ができる。それを僕は「基地」と呼んでいる。

基地に入るたびにいやな思い出がうかぶ。基地の中に入るときは、決まって叱られたときや腹が立ったときだ。

「二年坊主になったら、勉強机、買ってやるからな」

父は僕が小学校に上がる年の正月に、そう約束をした。なのに、入学式が近づいても父が机を買ってくれる気配はなかった。近所の友達が次々に本棚やライトの付いた流行りの機能デスクを買ってもらったという話を聞いて「新しい机は？」とねだったとき、父は「そんなものは要らねえ、あそこにある机を使え」と、ひと言で終わらせてしまった。

「机くらい買えない訳じゃないだろ」

^②泣きじゃくる僕を見かねた祖父がそう言ってくれたが、父はムキになったように首を縦に振らなかった。

「じゃあ、じいちゃんたちが買ってやる」と祖父が言くと「余計なことはするな」と、父は頑として受け入れなかった。

「まったく、お前のとうちゃんはへそ曲がりだね」と、祖母も呆れ顔だった。

僕は絶対に、^③こんな机は使わないと決め、夏はちゃぶ台、冬ならこたつで勉強をした。お古の机はランドセルや教科書を置いておく、物載せ台でしかなかった。

あれが僕の記憶にある父の最初のうそだった。父はいつも喜ばせておいて、結局は「だめだ」と言う。だったら、喜ばせるようなことを言わなきゃいいのに。この分だと、中学に入っても変速ギアの自転車も買ってもらえないかもしれない。

基地の中に、祖父母が寝るときに使っている電気スタンドを引っ張り込み、膝を抱えながら漫画を読む。夏場は中に籠もると暑さで全身が汗だくなるけど、基地の中にいると落ち着いた。

「何やってんだ」祖母が、立て掛けていた座布団を外して訊く。

「別に」

「ばかだね。こんな暑い日に、そんな所に潜って」

「いいんだよ」僕はムツとしながら答えた。

「みんなと遊びに行かないのかい？」

「うん、ああ。しばらく、やめる」

「ケンカでもしたんじゃないのかい？」

図星だったが、僕は「そんなじゃない」と言う。「放つといてくんない」と、はがされた座布団を直して基地を修復した。額や顎の汗を手で拭いながら、漫画本を二冊読み終える頃には、ランニングも汗でぐっしりと濡れた。

と、自転車が庭先に入ってきて、ブレーキを掛ける音がした。近所の人がやってきたのだと思った。

「あの一、すみません」

玄関先の祖母に話し掛ける声に僕は驚いた。その声は高井の声に間違いなかった。

「小木くん、いますか？」

「フミかい？ いるけど……」

「あ、小木くんと同じクラスの高井と言います」

「あれま、しっかりした物言いだね。ちょっと待っててね、今、呼んであげるから」

僕は祖母に呼ばれる前に、自分から基地を抜け出して縁側に出た。

「小木くん」

「おう、高井」

僕はこつちにこいよと、手招きした。

祖母は僕に近づくと「見かけない子だね」と小声で訊いた。

「ああ、東京からの転校生だから」

「そうかい。道理でこの辺りの子とは感じが違うと思ったよ」と言うと、祖母は家の奥に行った。

「よくオレンち分かったな？」

「学級名簿で調べた。でも、ちょっと分かりづらかったけど、あとは勘で」

高井はそう言いながら、何気なく家を見回した。洒落た高井の家とは似ても似つかない古い家だ。恥ずかしい思いがした。

「ボロいうちだろ」

「いや、うちよりずっと広いし、庭だって大きい」

高井が咄嗟に氣遣ったのが分かった。

「お前、よく家を抜け出せたな？」

「母さんが買い物に出た隙に」

「大丈夫なのかよ？」

「やることはやってるし。ただ、あれから、あんまり口をきいてくれないけどね」

あの母親ならそういう態度もとるだろうな、と高井に同情した。

「でも、煩くなくっていいよ」

たぶん強がりを言っているんだ。

「ふーん、そうか。で、何の用だ？」少しぶっきらぼうに訊く。

「不発弾探しはやってるの？」

「ああ、ちょっとは行ったけど、昨日と今日は行ってない。作戦を考えてるんだ」

さすがに全然行っていないとは答えづらく、うそをついた。

「ふん、だと思った」

⑤ 以前よりは打ち解けたとはいえ、お見通しだよ、といった鼻持ちならない感じがやっぱりする。きつと、僕のうそも見抜かれているのかもしれない。そう思うと余計、癢に障る。

と、祖母が丸いお盆に切ったスイカを載せて運んできた。

裏の畑でスイカを作ったこともあるけど、トマトや茄子とは違い、スイカのデキはよくない。中身が薄いピンク色で甘味がなかった。だから、丸ごとのスイカをスーパーで買って、裏の井戸の中に吊るして冷やす。

「あんまり冷えてないけど、これでも食べな」

祖母が茶の間から扇風機を持ってくると、首振りのポッチを押した。生暖かい風が左右に行き来する。

僕はスイカを挟んで縁側に並んで座った。僕は裸足の脚をぶらぶらさせた。

「スイカ、喰えよ」

「うん、じゃあ。いただきます」

僕はスイカに手を伸ばし、それを口に運んだ。祖母の言うように冷え冷えではなかったが、かなり甘くて美味しい。三日月に切ったスイカに歯形が付き、両方のほっぺたに汗が流れた。

「根岸くんに連絡した？」

僕はかぶりついたスイカの種を口の中で選り分けると、ほっぺたを膨らませて庭の遠くへ種を吹き出した。

「してない。向こうからだってこないし」

⑥ 高井はスイカの種を手のひらに出すと、それをお盆の隅に丁寧に置いた。

「みんなで不発弾探し再開しよう。やぶの中だつて探せばいい。ちゃんと蚊に喰われないように長袖のシャツとか着て、薬も用意して。それと、意地を張ってないで、根岸くんも誘ってさ」

「意地なんか張ってねーよ。それに悪いのは雄ちゃんだし。なんで、オレが謝んなきゃいけねーんだよ」

「小木くんは謝れなんて言っていないだろ。でも、みんなでやった方が効率もいいし、それに……」と、高井は言葉を切った。

「それに、なんだよ」

「それに……。みんなと一緒の方が楽しいだろう？」

雄ちゃんに意地悪されていた高井が、一緒の方が楽しいなんて。僕は黙ったまま、また種を吹き出した。

「根岸くんは、確かにお調子者で、すぐ怠けるし、気分屋だと思うよ。それに、僕のことは嫌いだろうし……。でも、小木くんとはずっと友達なんだろう？」

「うん、まあ。幼稚園のときからな」

「だったら、余計だ」

「お前が気にすることじゃねーよ」

縁側の前には、種を目当てに蟻がむらがり始めていた。

「羨ましいって思ってたんだよな」

「はあ？」

⑦ 思わずスイカを口に運ぶ僕の手が止まった。

「教室でもどこでも、君ら、いつも三人で楽しそうじゃないか」

「お前は迷惑そうな顔してたじゃねーか」

「ああ、あれはポーズさ」

僕が拍子抜けするほど、高井はあっさりと答えた。

「なんだ、それ？」

「僕は小さい頃から、習い事ばかりやらされてたから、放課後、誰かと遊ぶこともなかった。クラスメイトはいたけど、気づいたら仲のいい友達がいらない。こっちに転校してきても、実は一年で戻るって決まってるし。それに転校生だろ、仲間外れにされるのがいやだったんだな。どうせ、仲間外れにされるなら、自分から近づかないようにした方がカッコ良く見えるかなって思ったんだ。ほとんどの男子からは嫌われると思ってたけどさ。でも、君らがふざけると楽しそうで、羨ましくてさ。なんかそんなの見ててムカツとすることもあったし、

バカだなあつて思うこともあったけどさ。ほら、池跳びだつて」

「バカで悪かったな」

「でも、一緒に磁石取りに行ったり、不発弾探したりするのって面白かった。友達と遊ぶのって楽しいんだって。ほら、小木くんがさ、お前も仲間だつて言ってくれただろう。嬉しかったな。だから、続けたいんだよ、仲間で不発弾探し」

以前ならきつと、キザなヤローだとムカついたのだろうけど、高井は妙に素直に喋っている気がした。

「だから、根岸くんと仲直りしろよ。根岸くんが僕を嫌ったままでもいいからさ。明日は登校日だし、どっちみち学校で顔を合わさなきゃならないんだから」

「ああ、考えておく」

僕はそう言うのと、またスイカの種を遠くへ吹き出した。

(森 浩美『夏を拾いに』による 問題作成のために本文を一部変更・省略したところがあります。)

※1 おつくう……………面倒くさくて気が進まないこと。

※2 矢口たち……………乱暴者の六年生。文弘や雄二もなぐられたことがある。

※3 夏休みの友……………夏休みの宿題のこと。

※4 あれ……………文弘たちと付き合うことを反対する母親に、反抗したこと。

問一 ―線部①「自転車にまたがることはなかった」とありますが、この時の「僕」の状態を説明した次の文の□に当てはまること

ばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

雄ちゃんと ☐ ☐ ☐ (三字) をして、彼からは何の ☐ ☐ ☐ (二字) もないが、☐ ☐ ☐ (三字) は雄ちゃんだと

決めつけている状態。

問二 ―線部a「大見得を切った」・b「気が乗らずに」の本文中での意味として最も適当なものを、それぞれ後のア～エの中から選んで、

記号で答えなさい。

a 「大見得を切った」……………

ア うそをついた
イ 大げさに強調した
ウ 良い格好をした
エ 宣伝してまわった

b 「気が乗らずに」……………

ア 物事がどうでもよく、気が進まずに
イ 運勢が悪く、物事がうまく運ばずに
ウ 興味関心が持てず、積極的になれずに
エ 消極的で、友達のさそいに乗らずに

問三 — 線部②「泣きじゃくる僕」とありますが、なぜ「僕」は「泣きじゃく」ったのですか。それを説明した次の文の□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

いったん机を□□□□□(五字)と約束して「僕」を

□□□□□□□□□□□□□□□□(十六字)としてくつがえしたから。

問四 — 線部③「こんな机」とありますが、そのように表現した理由を説明した次の文の□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

近所の友達は□□□□□(三字)の机を持っていたが、

「僕」の机は□□□□□□□□□□□□□□□□(十六字)ものだから。

問五 — 線部④「ずっと広いし、庭だって大きい」とありますが、この時の「高井くん」の説明として適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 「僕」が自分の家をボロいと言ったので、とりあえず「僕」の家の良いところを挙げようと気をつかっている。
 イ 広い家を持つ「僕」がひかえめに自分の家をボロいと言っていることを、かえっていやみだと感じている。
 ウ 東京と違ってこちらではみんなの家が広くて庭も大きいので、「僕」のことをうらやましく思っている。
 エ 貧乏な「僕」が自分の家をボロいと言っているので、金持ちの「高井くん」は気まずくなってなぐさめている。

問六 — 線部⑤「お見通しだよ」とありますが、「僕」は「高井くん」が何を「お見通し」と思っているのですか。それを説明した次の文の□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

□□□□□□□□(六字)での不発弾探しは進んでいないことと、本当は□□□□□□□□(八字)にもかかわらず、「ちょっとは行った」と□□□□□□□□(六字)こと。

問七 — 線部⑥「みんなで不発弾探し再開しよう」とありますが、「高井くん」がそう言ったのはなぜですか。その理由を「」が楽しいから。」で終わるように本文中のことばを用いて、十五字以内で答えなさい。

問八 — 線部⑦「思わずスイカを口に運ぶ僕の手が止まった」とありますが、この時の「僕」の様子の説明として適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 日ごろの「僕」たちの行動をバカにして、迷惑だと感じていたはずの「高井くん」が、実は迷惑なふりをしていただけたと分かり、驚いている。
 イ 「僕」たちに意地悪をされていたにもかかわらず、「高井くん」が「僕」と「根岸くん」の関係を心配していることが会話の内でも分かり感動している。
 ウ 都会育ちの「高井くん」が、まさかやぶの中にあるはずの不発弾を探しに行こうとさそってくるとは思っていなかったので感動している。
 エ 「根岸くん」に意地悪をされていた「高井くん」が、「根岸くん」や「僕」たちの関係をうらやましいと思っていたのが意外で驚いている。

問九 この文章の特徴としてふさわしいものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 多くのたとえの表現が、夏を連想させ、爽快な友人関係を思わせる文体になっている。
- イ 客観的な表現が多く取り入れられ、語り手が「僕」の思っていることを冷静に批判している。
- ウ 「僕」の視点から語られており、友人との会話の中で変化していく「僕」の心情が描かれている。
- エ 倒置法が多く用いられており、読者に登場人物たちの感情が生き生きと伝わるようになっている。

國
五
日

第一回英数特科クラス入試
第二回特別進学クラス入試

座席番号
受験番号
氏名
評点

問	
④	①
⑤	②
かな	
	③

問 二	
④	①
⑤	②
	③

問三	
④	①
⑤	②
	③

—

問八		問七		問五	問四	問三	問二	問一
ウ	ア	ウ	ア		a	I		
				問六				
エ	イ		イ		b	II		5
						III		
						IV		



三

問十	問九

問二	問一
a	ア
b	イ
	ウ

[illegible][illegible]

問五	
----	--

[illegible][illegible]

問八	
問九	